

<書評と紹介> 美馬達哉著『〈病〉のスペクタクル：生権力の政治学』

Nomura, Kazuo / 野村, 一夫

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

595

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

2008-06-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003288>

美馬達哉著

『〈病〉のスペクタクル

——生権力の政治学』

評者：野村一夫

著者の美馬氏は臨床脳生理学を専門とする医学研究者であるが、同時に、フーコーの視点から医療社会学や医療人類学の領域でも活躍する才人である。以前、著者の医療化論を読んで、そのブリリアントな論考に感心したことがある。

本書は、タイトル通り、フーコー流の（最近のビッグネームではアガンベンの）生権力の政治学の立場から、病という現象を自然科学的事実ではなく「特定の社会的文脈のもとで構築されたスペクタクル」（3ページ）として説明する試みである。こう書いても内容を想起できる人は少ないかもしれない。ここでは病が政治的な現象として、その生成過程が詳細に描写される。その典型的な病として取り上げられているのが、SARSであり、鳥インフルエンザであり、エイズである。近年注目されてきたこれらの病がいかにして生成し、その政治的効果を発揮してきたかが問われている。

著者の病に対する見方は「疾病論の言語学的転回」という見出しによく集約されている。著者は次のように述べている。「つまり、現時点から振り返りながら、歴史的経過を順序立ててみるならば、最初にあったのは、何らかの理由によって、ある種の症状の組み合わせのパター

ンが、新しい病気（の可能性のある状態）として見いだされたという事態である。つぎに、このことが社会問題としてスペクタクル化されるなかで、新しい名前を与えられる。すると、その社会問題は、こんどは原因不明の新しい病気と見なされることになり、病気を引き起こす生物医学的原因の追究が行われる。運良く、病原体が「発見＝発明」されるならば、最終的には、生物医学的に首尾一貫した「疾患」として構築されることになる。」（18ページ）

これは社会構築主義の見方そのものである。ここから「ウイルスは言語である」という命題も引き出されるが、私はこれをいささかも奇異に感じない。少なくともウイルスという「言語」は、歴史的にウイルスという「実体」に先行するのである。

このような見方から問題となるのは、社会の側にある社会防衛的な機制である。このさい動員されるのは「受動的な犠牲者ではなく能動的な感染源」という感染症患者の強力なイメージである。かつての「チフスのメアリー」と同様の「感染源」イメージがSARSにおいても繰り返される。その結果、「社会を防衛しなければならない」という力が作動する。これは鳥インフルエンザについてもエイズについても同様である。アウトブレイク（感染爆発）に対する恐怖が社会防衛を作動させる。

「非常事態」こそが常態である（36ページ）とは卓見である。本書の趣旨と離れないとは思いますが、権力とはこのように「非常事態」をめぐる日常的に作動するのであろう。その意味で病（とりわけ感染症）をめぐるスペクタクルは、現代における権力のプロトタイプであるように思われるのである。

私が興味を抱いたのは、線引きの問題である。感染済みのものと未感染のもの（なるがゆえに防衛・保護しなければならない対象）のあいだ

に引かれる「防疫線」がどのように設定されていくのかという問題である。SARSにおいては感染源とされた人たちの周囲にラインが引かれた点で古典的なパターンが再演されているわけだが、鳥インフルエンザについては、人間と動物のあいだにラインが予防的に設定されている。それゆえ、一千万羽単位でのニワトリが感染の有無を問わず犠牲にされるのである。「監視の動物化」と著者は呼ぶ。そしてエイズの場合はと言うと、治療薬の知的所有権の問題から、貧困な地域の患者たちがラインのあっち側におかれているという具合である。これはやはり「政治」の問題なのである。

本書には、昨今ニュースに取り上げられることの多いES細胞についての論考も収められている。

ES細胞というものが、一人の子宮ガン患者の女性から採取された細胞から培養されたものであるということは、その後の数奇な歴史とともに要領よく書かれている。このような歴史的経過の示唆するところは興味深い。一言でい

ば、生物学の営みがいかに政治的特性を帯びているかということである。

著者はさらにフーコーの生権力論を延長して考える。つまり、フーコーは「人間個人の身体」に対する生権力から「人口」の生権力へと考察を進めたのであるが、著者はES細胞という「生のかげら」へも延長しようと試みる。ES細胞は再生医学において画期的な意義を持つとされるのだが、他方で「それは人間ではないのか」と問われる存在でもある。中絶論争とも大いに関わる。著者は結論を保留するが、重要な問題提起として脳裏にとどめておくべきであろう。

本書の後半は、脳死問題、脳を視ることに ついて、がん恐怖症、ストレスの政治学に充てられている。知的に刺激的な病論である。

(美馬達哉著『〈病〉のスペクタクル—生権力の政治学』人文書院、2007年5月刊、258頁、定価2,400円+税)

(のむら・かずお 國學院大学経済学部教授、
法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

ポスターの社会史

大原社研コレクション

大原社研の所蔵する戦前ポスター2,700枚を一挙公開。
「第一部 プロパガンダする紙片」
「第二部 ポスターの社会史」で
ポスターの歴史を解説。

法政大学大原社会問題研究所編
梅田俊英著

ひつじ書房発行
〒112-0002
東京都文京区小石川5-25-8 エスポワール8, 1F
TEL 03(5684)6871
FAX 03(5684)6872
定価 本体2,400円+税

付属CD-ROM
OISR.ORG
20世紀ポスター展

